

会田雄次先生の名著

『アーンロン収容所』を再読して

産経新聞の第4日曜日の書評ページには「ロンゲセラールを読む」と題するコラムがある。8月25日

付で寺田理恵氏が会田雄次先生の名著『アーンロン収容所』西欧ヒューマニズムの限界』を取り上げていた。初版(昭和37年)発刊と同時に熟読、再読、三読したこの著作に懐旧の思いを深くし中公新書版を買って一夜で読了した。巻を捲く能わずであった。教育召集兵として歩兵連隊に入隊した会田氏は、そのままビルマ(ミャンマー)に送られ、終戦とともにラングーン(ヤンゴン)の「アーンロン日本降伏軍人収容所」に入れられ、2年ほどを経て帰国するまでの精細な記録が本書である。酷薄の強制労働の過程で観察された、想像を絶する英国兵の特異な立ち居振る舞いを克明に記述し、そうして日本の知識人が信仰のように抱いてきた「西欧ヒューマニズム」の奇怪な怪物性を、実に関連な筆致をもって描き切った著作が本書である。

会田氏たちは収容所で想像以上にひどいことをされたというわけではない。それでも会田氏は一英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきた」と書き出さずにはいられない。

本書をかつて読んだことのある、特に男性の読者であれば次の部分を記憶しているに違いない。英軍の女兵士の兵舎の掃除についてである。バケツ、雑巾、ホウキ、チリトリをぶら下げて兵舎に入る時にはノックは不要である。大小の用便中でも女兵士は日本兵になんの関心も示さない。要するに日本人など女兵士にとってはただの家畜なのである。「女兵士はむりに威張っているのではない。東洋人に対する彼らの絶対的な優越感、まったく自然なもので、努力しているのではない。女兵士が私たちをつかうとき、足やあごで指図するのも、タバコをあたえるのに床に投げけるのも、まったく

自然な、ほんとうに空気を吸うようなならかななり方なのである」

正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

敗戦後の日本人兵士たちが狂おしいほどに望んでいるのは母国への帰還である。そんなこと英軍兵士はよく知っている。そして帰還の時期についてデマを時に流して日本兵を精神的に追い詰めて平然なのである。

「蛇の生殺し」のごときこのような所業をいくつも味わわされてきた会田氏は、帰還後15年を経ても本書を執筆する段になっても「万が一、ふたたび英国と戦うことがあったら、女でも子供でも、赤ん坊でも、哀願しようが、泣くのが一寸きさみ五分きさみ切りきさんでやる」という思いに駆られるという。

日本の知識人は「階級」という言葉を容易に使う。だが本家英国のブルジョアとプロレタリアは身体はもちろん、物の考え方から何から何まで隔絶したものだといふのはいう。英軍の士官と兵士との

違いは、何の事前知識のない日本兵にもはっきりと識別できるようなのだ。何よりも 士官の強靱な身体である。英軍士官に「青白きインテリ」などは決していない。他方、英軍の兵士たちときたら、日本人なら子供でもできるような計算がまるまるとできない。

「西欧ヒューマニズム」のどうにもしようのないほどに無様な怪物ぶりを描き出して、本書ほど秀逸な著作は他にないのではないかと思う。

「コレクトネス」も会田氏のいう「西欧ヒューマニズム」と同類のものなのかもしれない。(わたなべ としお)